

都市の風景に関する研究

(第2回)

* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事
渡辺直行

序章(つづき)

はじめに

都市の論議において現在最も必要とされているものは何か、それは哲学と現状分析とである、とのご指摘を先般いただいた。改めて考えてみれば、なるほど哲学と現状分析との有無が都市の将来を決めるに違いない、と思われる。都市にとどまらず世界の将来を決めるかもしれない。

周囲の議論を振り返ってみると、制度論、技術論はさかんであるが、それ以前にあるべき哲学論、現象論は寂しい。社会学者ですら社会学より哲学の衰退を嘆き、沈思黙考する哲学者ですら「よみがえれ哲学」と叫んでしまう昨今の状況に鑑みれば、とりわけ哲学論が重要である。都市研究はしばらくの間哲学論に特化してもよいくらいである、と哲学を知らない筆者は思う次第である。

ところで先般ある事情により正気を失った。その際、本研究に関する記憶の多くも失った。残ったものは記憶の断片ばかりである。それを眺めていたところ、風景とはそもそも断片なのではないか、ということを感じた。

ところで、先般笑気を吸った。それは快適であった。笑気で「笑いながらも楽しい我が家」を実現させれば都市問題の多くは解消してしまうのではないかと、細々した都市の利

害関係の調停案も笑気さえあれば笑諾できてしまうのではないかと、などとりとめもなく考えているうちに、正気を失ったわけである。はたして笑気の快適さと都市の快適さとはどう違うのであろうか。

以上のような次第で、今回はやや予定を変更し、快適さとは何かという問題意識を基底に持ちつつ、哲学論、現象論の重要性を論ずるという視点で、断片化した記憶を笑気と正気の狭間に並べてみた。

なお、前回の文章に対して「かたすぎてくだらない」あるいは「やわらかすぎてつまらない」という大変貴重なご意見をいただいた。本稿は胃腸薬ではないが、今回はこれらのご意見を少し踏まえてみた。

1. 都市研究における最重要論点

今後の都市研究においては、政策評価論、全体調和論、哲学論・現象論の3つが、独断ながら、最重要論点となる。を真剣に考えれば自ずからに至り、を真剣に考えれば自ずからに至る。

(1) 政策評価論

政策評価の時代

過去の都市研究をふりかえってみると、制度論や技術論に関するものが極めて多い。その中では、都市全体を視野に収めた制度

論、技術論よりも事業促進策のような個別論が多い。外国の制度の紹介やそれらを日本に適用するための方策に関する研究は相当多い。一方、外国の制度を適用してきた結果、それが日本の都市をどう良くしたのか、あるいはどう悪くしたのか、という研究はあまり見ない。特に制度が社会や生態系にどう影響したかを分析した研究は少ない。

例えば、都市の資産流動化策に関する研究は結構多いようだが、その中では外国の制度の紹介やその導入論が多いようである。効果検証論もなくはないのかもしれないが、そのほとんど、あるいはほぼ全部は、経済に関するものであろう。都市内の資産を流動化すべきか否か、不動産をマネー化すべきか否かは、都市の社会にとっても大問題である。それは、市民意識、都市に対する責任感、コミュニティ維持等に少なからず影響する可能性がある。しかし、それらを検証した研究は見たことがない。はたしてどのくらいあるのであろうか。

要するに、これからどうするという研究は多く、これまでどうであったかという研究は少ない。特に社会に関するものは少ない。生態系に関するものも同様であらう。これまでやってきたことが良かったのか悪かったのか、これをやらずにあれをやっていればどうだったのか、ということを経験的に論じた研究は、極めて少ないであらう。

過去の製品開発の成功不成功のきちんとした分析なくして新しい製品開発ばかりをやっていけば、企業はどうなるのであろうか。企業に十分な資金余力があり、需要も拡大しており、需要が拡大する方向もおおむね見えている時代であればともかく、今のような時代では遠からず破産する。

都市という人工的な社会も基本的にはこれと同じであらう。経済力が拡大傾向にあり、未だ「大きな物語」があり、人々のニーズの方向もおおむね明らかな時代であれば、個々の政策が多少ぶれていても大過はなく、数ある政策の中のいくつかでも当たればそれで社会が存続できた。このような幸運なときに将来をきちんと見通してしっかりとした仕組みを作っておけばよかったのであろうが、それが言うは易く行なうは難しいのは企業も社会も同じである。

「普遍」が失われ、活力も低下傾向にある社会で旧来方式をやり続けたら、社会は加速度的に衰退する。政策効果の検証が強く求められる時代になっているが、また、その「効果」とは何の「効果」だったのか、その「効果」をもたらすことに関するコンセンサスはどの程度得られていたのか、その実施はどのようになされたのか、というプロセスの視点も重要になっている。厳しい環境を関係者が力をあわせて生きていくためには、現在の「効果」よりもコンセンサスづくりや透明性の確保の方がはるかに重要であるという見方もできる。

政策評価の視点 - ヒューマンエラー

過去の政策をあらゆる角度から総合的に検証するための研究が今日ますます重要になっている。その際、個々の「商品」の検証もさることながら、「商品開発のコンセプト」も検証されなくてはならない。例えば、「一極集中」、「多極分散」、「核都市育成」、「都心居住」、「土地利用の高度化」、「不燃化」、「用途純化」、「立体化」等の考え方の検証である。そして、検証すべきは「商品」や「コンセプト」の是非のみならず、それらがもたらされ

たプロセス、関与した組織の実態等にも及ぶ。これは、組織を中立的・客観的に見る立場ではじめて行いうる。

以上のような検証を行う場合、政策の失敗を一種のヒューマン・エラーとしてとらえる視点が有効であるように思われる。ヒューマン・エラー調査のあり方に関しては、ジェームズ・リーズンの次の指摘が要を得ている。

ヒューマン・エラーは結果であって、原因ではない。(中略)エラーは、その上流にある作業現場や組織要因によって形づくられ、そして引き起こされたものである。エラーを特定することは、原因調査の単なる始まりであって、終わりではない。エラーの結果として起きた大事故の原因の説明と同じくらい、エラーがなぜ起きたのかを詳細に説明することが必要なのである。なぜエラーが起こったのか、その筋書きを理解することによってのみ、初めてエラーの再発を防止できるのである。

(ジェームズ・リーズン『組織事故』)

塩見弘監訳、高野研一・佐相邦英訳、
日科技連出版社1999年)

過去の政策に問題があった場合、その問題を認めただけでは検証したことになっていない。その政策はどのような仕組みの組織がどのような「筋書き」に基づきどのような決定プロセスを経て実施したのか、それを「詳細に説明」できる研究を行うことが「再発」を防止するために必要である。そのような検証がないと、言葉だけを入れ替えて同じようなことが繰り返されるおそれが十分にある。

政策評価の内容

個々の政策に関しても、政策の背景にま

でさかのぼった検証が必要である。何がしかの効果があつたとするだけではまったく検証になっていない。まずは、意図された政策目的はそもそも適切だったか、課題がいくつかの分野に及ぶ場合採用された政策は特定の分野に偏っていなかったか、政策の副作用はなかったか、政策間の相乗効果ないし相殺効果はなかったか等広い視野からの検証を行わなければならない。

次に、政策を実施しなかった場合と比べてどうなのか、政策が採用されなかった地域と比べてどうなのか、という視点での効果差の測定が必要である。そして、仮にプラスの差が認められたとしても、その差は果たしてその政策によってもたらされたものなのか、という疑問を持たなければならない。更には、その差がその政策によってもたらされたことが検証されたとしても、他の政策で行えばより効率的に同一の効果をもたらすことができたのではないか、あるいはより大きな効果をもたらすことができたのではないか、という疑問も持たなければならない。検証者はすべてを深く疑わなければならないのである。

見えない効果の重要性

以上のような検証を積み重ねた結果、採用された政策がベストの効果をもたらしたという結論が得られたとしても、それだけでは未だまったく不十分である。政策を実施するプロセスはどうだったのか、地域住民等の関係者はどの程度参加したのか、その参加の形態は形式的なものだったのか実質的なものだったのか、会議では具体的にどのような討論があったのか、討論の結果はどのように処理されたのか、地域住民の意見で計画はどの程度軌道修正されたのか、政策運営に

関する地域住民の評価は従前に比し高まったのか等の詳細な検証が必要である。

コンセンサスづくりに入念なプロセスを導入することにより仮に政策の「効果」が相当低下するとしても、地域の長期的な発展を考えればその方が望ましいということが十分ありうる。政策の結果地域の経済力の衰退が加速しても、これで数十年後にはきっと良くなると地域の人々が確信でき、痛みを耐えようと決意できたのであれば、悲壮な元気が出たということで、とても大きな効果があったということになる。最近よく言われるようになったコミュニティ形成(社会のサステナビリティの強化等)の効果があったわけである。

もっともこのコミュニティ形成の効果なるものを評価対象としてとらえるのはなかなか難しい。「コミュニティ形成」とはいったい何を意味するのか。幸田文の「小住宅群落」には、あまり近所付き合いのない郊外住宅地に三味線の師匠が越してきてからの地域の変化が次のように描写されている。

爪弾きという三本の糸の音がなかだちして、近所近隣の奥さまがたは急速に親密な交際をするようになった。糸でつながれたわけである。

しかし交際が繁くなって、活気が出て来て、楽しくなったにもかかわらず、面倒くさいことも伴ってきた。万事がうるさくなったのだ。知るといことは、単純ではなくなるのだ。では何を知ったかという、ぼろやあらを知ったのである。

(幸田文『回転どあ・東京と大阪と』

講談社文芸文庫、2001年)

望ましいコミュニティとはどのようなものか、

結局地域住民が決めるしかない。地域に活気が出るなどということも単にひとつの価値観に過ぎないわけで、これからはそのようなことよりも人のぼろやあらを知ることのない地域を望む人が増えてくるかもしれない。都市に公共の精神があれば、人のよさがほしい、「峠の我が家」の seldom is heard a discouraging word という状況がほしいという人が増えてこなければおかしい。

経済的に貧しくとも自動車や建設工事の騒音が一年中ない静かな環境を望む人も増えてくるかもしれない。活気があることが望ましいか否か、地域の外の人間が先験的に決められることではない。藤本寿彦は「声(ノイズ)」と「音(ね)」という区別をしているが、活気の裏でノイズばかりが大きくなった20世紀の後では、なおさらこの点が気にかかる。

コミュニティ形成の効果など政策効果に含めるべきではない、という考え方もあるかもしれない。人口の増加率、所得の上昇率、資産価値の上昇率等、「客観的に」計測できるもののみで評価すべきではないか、という極めて近代的な価値観は未だに根強くあるかもしれない。しかし、それは地域づくりの真の目的を追究する姿勢を失っている。この点は、住民の自信や満足度等の高まりを重視するイギリスの再生政策の評価方法に学ぶべきである。

運・命は紙一重

政策効果の評価とは、突き詰めて考えれば、人間の生き様の自省ということになる。その際、通常必然と考えられていることも本当に必然なのか、おおいに疑ってみることが大切である。これからの都市づくりにおいては、偶然と必然との関係を深く考察することが最

も重要であり、この考察ぬきに都市の哲学を語ることはできない。今回はそれに深く立ち入る余裕がないので、ここでは映画の台詞をいくつか引用するにとどめたい。

ヒッチコックの映画『北北西に進路を取れ NORTH BY NORTHWEST』には次の台詞がある。

Roger Thornhill: Here we are again.

Eve Kendall: Yes.

R: Think how lucky I am to have seated here.

E: Luck had nothing to do with it.

S: Fate?

これは偶然なのか運命なのか。実のところはEveがこの後"I tipped the steward \$5 to seat you here if you should come in."と言うのでその限りでは必然に近いが、Rogerが食堂車に現れたことは偶然であるとも言えるし、あるいはそもそも彼がこの事件に巻き込まれたこと自体は偶然である。このように偶然と必然との違いは極めて微妙である。

比較的新しい映画では『ハムナブラ2 MUMMY RETURNS』というのがある。

Ardeth Bay: This was all preordained thousands of years ago.

Rick O'Connell : Coincidence.

A: My friend, there is a fine line between coincidence and fate.

数千年も前から決まっていた運命と偶然とが紙一重という発想は素晴らしい。違いがはっきりしているのか微妙なのか、微妙である。ちなみに紙一重は The line between good and evil is thin as a knife's edge. などさまざ

まな事柄に関して当てはまるようであるが、後に述べる仮想現実・制度現実と実現実との違いもそのようなものであろう。

このようなことで、何が政策によってもたらされるものなのか、何を政策によって変えうるのか、政策より高次のものとして扱わなければならないものは何か、政策評価はどのような世界観の下で行うべきか等、考えなければならないことは数多くある。

ところで、ヒマラヤ近くのある地域では、食生活が非常に簡素である。簡素ではあるが、口から入れれば、やはり、出る。しかし、ここがポイントであるが、紙が要らない。筆者はそれを目撃したわけではないが、現地に調査に入ったその道の権威から個人的に聞いた話である。当時はあまり関心がなかったので聞き流してしまっただが、今思えばなかなか深遠な話である。なぜ紙が要らないのか。それは乾いた無駄のない人生だからである、というのは筆者の解釈である。紙が要らないかわりに寿命は30年ほどである(ちなみに、カナダ・エスキモーや砂漠の遊牧民等も紙を不要とするらしく、紙の要不要には風土条件も大きく影響している可能性はあるが、ここではそれを考察する余裕はない)。

このような地域の一部で経済開発を行えば、商品経済が浸透して食生活が格段に「豊か」になり、寿命がかなり伸びるに違いない。そして、紙が必要になる。近代経済学の「思想」に基づけば、自由市場が人々を最も望ましい状態に導くはずなのであるが、その「神の見えざる手」に導かれた結果、紙が手に導かれた、ということになる。近代経済学はなかなか紙まで気が回らないらしいが、これはとても重要なことである。寿命と紙と、どちらが大切か。生きるべきか死ぬべきか、拭

うべきか拭わざるべきか、それは紙のみぞ知る。ここが調査の難しいところである。

つまるところ、日本人が直面している問題も本質はこれと同じである。経済が「豊か」ならよいのか。欲しいのは地位か名誉か金か紙か。こんなものを吹き飛ばすことができ初めて都市の哲学を考え始めることができる（紙はとりあえず別）。都市の風景もその先に見えてくる。

政策評価の哲学

上のように見てくると、そもそも政策評価とは何なのか、とても難しい問題である。まずは人間の生活のあり方を十分に省察しなければならない。小津映画を例にして言えば、『出来ごころ』（1933年）や『東京の宿』（1935年）、『一人息子』（1936年）に描かれたコミュニティの「豊かさ」をどう評価するか、『戸田家の兄弟』（1941年）、『長屋紳士録』（1947年）への「豊かさ」の変化をどう評価するか、『東京暮色』（1957年）や『お茶漬の味』（1952年）、『お早よう』（1959年）等に描かれた社会の変化に都市づくりはどう関わっているのか、という問いがある。これらの問いを考えることができなければ、政策がそれらのコミュニティに何らかのインパクトを与えた時の「豊かさ」の変化は、わからない。

現時点で言い得るのは、その地域を総体としてどうするという哲学が地域関係者のコンセンサスの上に成り立っていないければ、政策評価はやりようがないということである。例えば地域の資産価値が高まったことや商店の売り上げが伸びたことが果たして好ましいことであったか否か、判断できない。概念なき政策は戦略なき作戦と同じで、特定の作戦が何を意味するか、まるで評価できない。

全体の戦略などおかまいなしに自分の作戦の成功を喜んだりすることにもなってしまう。

要するに、自分たちはどう生きるべきなのかを地域関係者が主体的に考えることが、政策の内容としてではなく、政策の前提として必要である。また、当然のことながら、政策を評価する者にも思想がなければならない。評価する者にもされる者にも深い人間理解と哲学とが、すなわち倫理が要求される。それではじめて政策評価が可能になる。ちなみに本研究で想定している風景とは、倫理を内包する風景である。これは、倫理と切り離された景色の議論とはまったく別次元のものである。

政策評価の課題を以上のようにとらえれば、それを研究する者にも当然のことながら倫理が要求されることになるので、これはやはり大変な課題である。

(2) 全体調和論

最悪のケースの重要性

政策の失敗をヒューマン・エラーとしてとらえる場合、最悪のケースを十分に研究することが何より重要である。最悪のケースとは、個々の判断ミスがすべて重なってチェックの穴が通ってしまった場合である。都市に関して言えば、個々の政策の副作用が、ある点で重なって、社会の空洞化、監視社会化（ゲーテッド・コミュニティ化、過防備社会化）、ヒートアイランド化等が取り返しのつかない状態になってしまう場合である。そのとき都市はどうなるか、それを回避するためには何をしなければならぬか、ということ十分に研究しなければならない。

最悪の場合を考えようとすると精神論的な妙な反論が返ってくることがあるかもしれな

いが、それは「作戦不成功の場合を考えるのは、必勝の信念と矛盾する」(戸部良一他『失敗の本質』ダイヤモンド社1984年)という感覚と共通のものであろう。かつての日本ではそのような感覚のもとでコンティンジェンシー・プランを欠いた場当たりの「作戦」が展開されたというが、それを行った組織の実態は次のようなものであった。

日本軍は、初めにグランド・デザインや原理があったというよりは、現実から出発し状況ごとには場当たりに対応し、それらの結果を積み上げていく思考方法が得意であった。このような思考方法は、客観的事実の尊重とその行為の結果のフィードバックと一般化が頻繁に行なわれるかぎりにおいて、とりわけ不確実な状況下において、きわめて有効なはずであった。しかしながら(中略)、日本軍の平均的スタッフは科学的方法とは無縁の、独特の主観的なインクリメンタリズム(積み上げ方式)に基づく戦略策定をやってきたといわざるをえない。(中略)

日本軍が個人ならびに組織に共有されるべき戦闘に対する科学的方法論を欠いていたのに対し、米軍の戦闘展開プロセスは、まさに論理実証主義の展開にほかならなかった。(中略)日本軍のエリートには、概念の創造とその操作化ができた者はほとんどいなかった。個々の戦闘における「戦機まさに熟せり」、「決死任務を遂行し、聖旨に添うべし」、「天佑神助」、「神明の加護」、「能否を超越し国運を賭して断行すべし」などの抽象的かつ空文虚字の作文には、それらの言葉を具体的方法にまで詰めるという方法論がまったく見られない。したがって、事実を正確かつ冷静に直視するしつけをもたないために、フィクションの世界に

身を置いたり、本質にかかわりない細かな庶務の仕事に没頭するということが頻繁に起こった。

(戸部良一他前掲書)

このような組織は、言葉遊びを繰り返すポスト・モダン社会を先取りしていたような感すらある。「概念の創造とその操作化」ができないということは組織としては致命的であろう。このようなことから、政策評価論に組織論を含めることが極めて重要であることがわかる。「日常の小さなことでも社員が『おかしい』と口に出して議論し、改善する仕組みが重要だ」(高野瀬忠明雪印乳業社長、日本経済新聞2004年9月7日朝刊)というのは当然のことで、「おかしい」という声が小さい組織は本当におかしい。組織一丸となって組織は墮落する。

全体を見ることの重要性

さて、最悪の場合を考える際に最も重要なことは、気づきにくいことを重視することである。超高層ビルの林立などは気づきやすいが、監視カメラの増加や気温の上昇などは気づきにくい。虫の数の減少などはビルの中で生活する今の都会人はほとんど気づかない。人の心の変化はさらに気づきにくい。

このようなことひとつひとつに分析的アプローチを試みるのも可能であれば大変結構なことではあるが、専門家がすべての分野を網羅できるわけではない。人間が分析的に認識できる範囲などはたかが知れたものかもしれない。仮にすべてについて分析的アプローチが可能であったとしても、それを総合するのは誰がやるのであろうか。

このように考えると、何より大切なのは全体を感じるということであろう。これは、「原因 - 結果」の論理で外部の物を「合理的」に処理する式の発想を脱け出ることでもあり、また、心のあり様を見つめることでもある。

西洋の技術は自然に対するものとして発展してきたが、いまや対さなければならぬのは人間自身である。いかに自然をコントロールし人工をつくるかではなく、いかに心を調和させるかが都市づくりの要となってきた。この点に関しては村上陽一郎の次の指摘が参考になる。

プラスチックは、極めて利用価値の高いものとして、ここ半世紀の間珍重されてきた。しかし、今では、その機能ゆえに、プラスチックは大きな問題を抱えている。最大の問題は、堅牢性と表裏をなす非腐敗性である。(中略)

勿論、対策は講じられている。一つは、素材としてのプラスチックの改良である。(中略)現在普及しつつある「生分解プラスチック」は、基本的に、多少の強度の犠牲のもとに、澱粉をポリエチレンの分子の間に挟み込んだものである。(中略)こうしたプラスチック製品は、確かに地中に埋めて置けば、あるいは水中に漬けておけば、適當年月を経ると、分解して跡形もなくなってしまふ。それでよいではないかと考えられるだろうか。

確かに、見た目には跡形もなくなったプラスチック製品ではあるが、実は、分解されたのは澱粉の部分だけであって、ポリエチレンの高分子の部分は、そのまま残っている。それが直接目に見える形になっていないだけに、危険はなお一層大きいと言えるだろう。そうした目に見えないプラスチックが土壌の表層に蓄積したり、海洋や湖沼のなかに沈殿していったと

したら。(中略)

地球環境問題の直接の原因は、二酸化炭素であったり、窒素化合物であったり、プラスチックのような、目に見える形での人工物とはいえないかもしれない。しかし、それらもすべてが人間の働きから生まれてきたものだとすれば、間接的にはそれらも「人工物」に数えてもよいとも言えよう。(中略)

18世紀ヨーロッパが「文明」という概念を開発したとき、(中略)人間にとって、「危険」の根源は「自然」にあったのである。(中略)現在われわれの「敵」、克服し、支配し、制御し、馴致しなければならないのは、(中略)人間の解放された欲望、快適性や利便性や経済性を、ひいては自らの幸福を追い求めて止まない、飽くなき人間の欲望であることになった。(中略)我が内なる「危険」、それが危険の本質となった。

(村上陽一郎『安全学』青土社1998年)

心の調和を得るということは、「原因 - 結果」の短絡的な部分的判断を脱け出し全体的に見るということでもある。それは、問題に対してあくまでも技術を積み上げて個々に解決していこうとする対症療法的姿勢、あるいは技術信奉的な近代西洋の発想を抑え、目に見える個々の現象の背後にある全体的な動きをとらえようとする姿勢である。東洋的発想はもともとはそのようなものであったであろう。例えばヒートアイランドに対しては個々の技術で対処するよりも都市全体の風水を見直すことが大切になる。

都市を内として見る必要性

以上のような全体調和論を突き詰めていけば、そこに都市のあるべき風景が見えてくる、あるいは風景を通じてそれが見えてくる、

というのが本研究のとりあえずの考え方である。その風景は、コールハースが次のように述べるマンハッタンの姿の対極にあるものであろう。

マンハッタンというメトロポリスはある神話的な到達点を目指す。すなわち、世界が完全に人間の手によって作り上げられ、それによって世界が絶対的に人間の欲望と一致するような点をめざすのである。

このメトロポリスは麻薬的效果を及ぼす機械である。それ自体が逃れる手段を提供してくれぬ限り誰もそこから逃れることはできない……。こうしてそれは、浸透力を及ぼしながら、自然に取って代わり、まるで自分が自然であるかのような顔をしている。要するにありふれた、ほとんど誰の目にもとまらない、そして当然ながら言葉になり難い存在になってしまっている。

(中略)

今世紀も押し詰まった今、このメトロポリスの持つ桁外れの誇大妄想的主張やそのさまざまな可能性について素直に論ずることはなかなか厄介な仕事である。

(レム・コールハース『錯乱のニューヨーク』

鈴木圭介訳、筑摩書房1995年)

このような都市の姿は、自己充足的、麻薬的、そして非独創的という点で、ポスト・モダン社会の内向きの姿にとてもよく似ている。つまり、ポスト・モダンはモダンが生んだということである。このような姿の対極にあるものとしての風景は、やはり目に見えるものを重視しては論じられない。目に見えるものと目に見えないもの、あるいは目立たないものの全体をあわせて考えることが必要である。あるいは目に見えるものを支えるものを特に

重視して考えることが有益であるかもしれない。

目に見える都市を支えるものとは自然社会経済の諸関係であろうが、それを突き詰めていくと結局は都市のありよう全体を考えていくことになり、それは哲学ということになる。通常的思考では、都市社会とは農村社会と異なり個人では制御できない都市全体にわたるさまざまなシステムの相互依存関係が基盤になっている社会であり、その社会を維持するためには何よりそのシステムを総体として把握する技術的、制度的視点が重要である、という程度の論になると思われるが、そしてその論はそれなりに妥当なものではあろうが、その背景にはすべてのものを人間の制御下に置くべきという思想がある。自然も人間が制御するという思想である。もちろんそんな思想は時代遅れである。

人間が自然を支配できるなどというのは西洋近代の思い上がりであるという考えが強まっている。もちろん今でも諸問題を技術論、制度論で解決しようとする試みはさかんではあるが、そしてそれらは挑戦という意味で意義のある試みではあるが、やはりそれとは別に大局的な観点から制度論、技術論の限度を知るといことが今や都市を論じる上でも必要不可欠な節度となっている。その節度とは倫理であり哲学である。これは、都市を自己の内として見る倫理になるかもしれない。人は環境の中で自己改革の必要性を感じるように、都市を自己の内として認識することにより都市改革の必要性を感じるができる。そうであるならば、その契機となるのが風景である。

都市の糸

都市の風景とは、結局倫理を内包した風景である。それを哲学なしに論じても、それは構造からも伝統からも思想からも自由になりやがては自由からも自由になって存在拠点を見失う類のものでしかない。周囲から切り離された存在根拠不明のテーマパーク的景色を都市の風景であると論じるようになってしまう。都市から風景が消えるということは、都市から倫理が消えるということでもある。

20世紀の都市の特徴は、マンハッタンの主張にある。つまり、さまざまな制約から解放されて自由に巨大な人工物をつくることによって、我々が都市のすべてをつくっているのだ、という主張である。都市では我々が創造主である、という主張であると言っても過言ではない。このような考え方に対しては、次の言葉が参考になる。

風が飛翔するのは、糸によって拘束されているからだ。糸は風にとっての拘束であると同時に、確実に飛翔するための源泉でもある。

これは山本学治の言葉として吉田桂二『保存と創造をむすぶ』（建築資料研究社、1997年）に引用されているものであるが、20世紀の都市はこの「糸」の存在をかなりの程度忘れてきた。その背景には、鉄筋コンクリートの導入等により力学からかなり自由になった技術論や、土地をまっさらな状態にしてその上に完全に計画的な人工物をつくるのが望ましいとする制度論があったであろう。より高くより自由に飛ぶために自ら糸を切ってしまった風は、自分では自由にのびのびと活動しているつもりかもしれないが、離れて見てみれば単に落下しているだけである。

この糸の例えは、あやつり人形の糸として考えてみることもできる。あやつり人形の製作では中国泉州のものが特に有名で、その絢爛たる人形の造形はそれ自体まことに素晴らしいが、それでも糸であやつられて動き出すと、飾ってあった時とは比べ物にならないくらい人形が輝きだす。糸であやつられてはじめて真に生きる、というのがあやつり人形である。

都市の美しさも、動きのない街並みを透視図法的に見ていたのでは理解できない。そこに働いているさまざまな糸の動きを感じることができてこそ、都市の真の美しさがわかる。都市の風景とは、このような動きのある美しさとして理解すべきものである。

また都市とは、公共という目に見えない概念に人々が目に見えない糸で結ばれているからこそ成立する社会である。この公共とは何なのか、糸とは何なのか、糸はどのように結ばれるべきか。このような問いは都市再生を考えるための最も基礎的な問いであろう。

見えない都市

以上のような目に見えない動き、目に見えない概念、目に見えない糸を考えることが、現下の都市づくりや都市研究における最大の課題である。ルイス・カーンは「建築は存在しない」と言ったそうだが（工藤国雄『講座 - ルイス・カーン』明現社、1981年）、それにならえば「都市は存在しない」ということであろう。果たして20世紀の日本の都市はこういったことをどの程度考えてきたのか、まずは十分に調査、研究、評価を行って見なければならぬ。

目に見えないものの重要性を表現する言葉としては、「つまるところ、住宅は「収縮」し

続けているのである」(田上健一『拡張する住宅』三省堂書店2004年)というものもある。「都市は「収縮」し続けている」と言うこともできるであろう。収縮し続けているのに目に見えるものは膨張し続けている、膨らんでいるのは空虚さである、というのは、泡である。

目に見えないものの大切さで思い起こされるのはサン・テグジュペリの『星の王子さま』である。星の王子さまが飛行士に「ヒツジの絵をかいて」と言うが飛行士はなかなかうまく描けず、とうとうなげやりになって並んだ穴の開いた四角い箱の絵(その中にヒツジがいるつもり)を描くと、星の王子さまはそれを覗き込んで「こんなのが、ぼく、ほしくてたまらなかったんだ」と言う。聞きようによってはモダニズムの権化のようでもあるが、これに関しては佐治晴夫が次のような解釈をしている。

なぜ箱の絵に理想のヒツジを見たのでしょうか？ 結局のところ、作者以外知る由もないと思うのですが、このずっとあとになってかわされるいくつかの会話の中にヒントがありそうな気がします。

たとえば、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」というキツネの言葉をうけて、「目では、なにも見えないよ。心でさがさないとね」と王子が強調するくだり、さらに、生か死かをかけて井戸を探す場面で、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ」という王子に、飛行士が「そうだよ、家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないのさ」と答えるあたりなどです。

ここで素人の私が文学論を展開するつもりはさらさらないのですが、ただひとつ言えることは、この「なにもない」とか「見えない」とい

うような表現の中に、私たちの宇宙の基本的な性質をかいま見るような面白さがあるということです。

(佐治晴夫『宇宙の不思議』

PHP文庫、1996年)

佐治晴夫はNASA等のET探査計画において交信に音楽を用いることを提案した宇宙物理学者であるが(宇宙人と最初に交信することが既に決まっているという)、その発想の基礎にはやはり目に見えないものを大切にするという考えがあったのであろう。その佐治が金子みすゞの詩について述べていることが印象的である。

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのやうに、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぼぼの、
瓦のすきに、だまって、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

これは1903年に生まれ、1930年にわずか26歳の若さでこの世を去った天才童謡詩人、“金子みすゞ”の「星とたんぼぼ」という詩です。(中略)彼女のすごさは、“真昼の星”を望遠鏡で見せられなくても、心の中でそのことをあたりまえのこととして知っていたことです。しかも、天上の星と地上に咲く月並みな花を等価なも

のとしてさりげなく対峙させているところに天
振りがかがわれます。(中略)「見えないけれ
どもある」ということを知るのは、“謙虚さ” “
寛容さ” そして “やさしさ” にも通じるもので
す。

(佐治晴夫『宇宙はささやく』

PHP文庫、2000年)

見えないものを知るということ

見えないものを知ることが “謙虚さ” “寛
容さ” “やさしさ” に通じるという点に関し
ては、次のように説明されている。

虹を見てその美しさに驚き、感動し、なぜ？
と問いかけ、そのからくりを知って、なおいっそ
う自然に対して謙虚になるというのがほんとう
に “わかる” ということだと私は思っています。

私たちにとって風は見えないものの代名詞
のようになっています。しかし、私たちはみず
からの頬で風を感じることができますし、雲の
動きから風の動きを見ることができます。私た
ちのまわりには目や耳など、いわゆる五感では
直接感じとれないものがあふれています。誰か
が悲しいといってもどれくらい悲しいのかわか
りませんし、誰かを好きだといっても、その気持
ちがどれくらいなのかを的確に表現するのは
むずかしい。(中略)

科学は視点を変えることによって「見えない
もの」でも “存在する” ことを教えてくれて、自
分の五感の限界を知り、自然を含めて自分以
外の存在に対して謙虚になり、同時に寛容に
ならねばならないということを教えてくれるもの
でもあるのです。

宗教とは本来、神や真理といった世俗を超
えた何ものかを感じるといふ経験と結びつい
ていて、きわめて個人レベルの世界です。そ

れは自分自身の有限性を知り、みずからの生
と死の意味についても、ひとつの道しるべとな
るものでなければなりません。(中略)

それでは宗教が人々に真の安らぎを与え、
世界の平和に貢献できるための条件とは何で
しょうか。まず他者に対して積極的に寛容にな
ることでしょう。そのためには異なる分野との対
話を通して共に学び合い、共に生きるための
知恵を探す必要があります。ヒエラルキーや個
人崇拜などの否定はもちろん必要ですが、組
織をつくるのであれば対等で平等な人間の共
同体としての意識をもち、集団の外の他者に
対しても対等者としての関心をもつことでしょう。

(同)

目に見えないものがあることを知って謙虚
になり、他者に対して寛容になることができる、
他者に共感できるようになる、共に生きる知
恵を探すことができるようになる、というのは
都市社会成立の基礎でもある。これが失われ
れば、都市は崩壊する。ところが現代の社
会は「偶有性」(大澤真幸)を失う傾向にある
という。この傾向は、都市社会崩壊の傾向で
もある。

さて、目に見えないものを大切にすること
の大切さは以上のとおりであるが、それは都
市の風景にとっても同様であり、その考察は
結局は哲学に至る。

ちなみに工藤前掲書によれば、カーンは
建築家が知らなければならないものを3つ挙
げたという。 職能に関する十分な知識と人
間の生活に対するあり方、 哲学と宗教、
建築は存在しないということ、である。おそら
く都市に関わる人間についても同様である
う。

(3) 哲学論・現象論

「標準化」の限界

以上のようなことで都市研究の最重要課題は哲学論ということになるのであるが、認識は「悟性」と「感性」とから成立するというカント的な考え方に従えば、都市の認識は哲学論と現象論とから成立する。先にも述べたように、都市研究の分野では制度論や技術論がさかんであったような印象がありそれら自体は有用な部分が多いとは思いますが、これからは哲学論、現象論に格段の力を入れなくてはならない。「大きな物語」が失われた今日、哲学論がなければ我々はどの方向へ漂っているのかわからず、現象論がなければ今どこにいるのかもわからない。つまり制度や技術を適用することが望ましいかどうか判断できない。個々の「望ましい」制度や技術が、全体として望ましい状況、望ましい方向をつくりだすのか否か、判断できない。制度や技術を個々に採用し続けられれば、社会は分裂するかもしれない。

制度論、技術論を振り返ってみれば、それらは近代化の原動力として人々に多大な恩恵をもたらしてきた。それは主に効率性の向上を通じるものであったが、その効率性は一言で言えば「標準化」によって実現された。つまり、制度や技術は物事を標準化する性格を持っている。

過去の「標準化」に関しては、橋本毅彦『<標準>の哲学』（講談社、2002年）にさまざまな事例が紹介されているが、その中でも都市づくりの観点から特に興味深いのが、西洋の城塞（都市）設計の変遷である。

コンスタンティノープルはオスマン帝国の巨大な大砲により陥落してしまったが、それ以来西洋では都市を攻める技術も守る技術

も大砲を軸に設計された。西洋の昔の都市は単純な円形や方形をしていたが、大砲の時代とともに星型のような幾何学的な形へと変化していった。それは外部に対する砲撃の死角をなくすためであるが、攻める側は塹壕の配置を細かく設定するようになり、都市側も防御力をさらに高めるため星型の構造を二重、三重に設けたりして、都市戦は次第に長期戦、消耗戦になっていった。都市が要塞化していったわけだが、要塞攻略戦がいかに大きな犠牲を伴うものであるか、日本人ならおそらく旅順要塞攻略戦を思い起すであろう。時代も施設も上記のものとは異なるが、旅順要塞は当時最先端の近代要塞であったと言われ、その攻略戦では9日間で日露あわせて8,000人以上の戦死者が出た。

さて、都市の要塞化とはすなわち都市防備の近代化、巨大化ということであるが、それは当時の人々には都市の必然的傾向であると思われていた。その考え方を覆してしまったのがプロイセンのフリードリヒ大王である。彼は、破壊力を高めた軽量の小火器を生産させて部隊の機動力を著しく高め、その部隊を縦横に移動させることによって倍の勢力を持つフランス軍に対してすら勝利した。戦争は都市を中心とした拠点型のものから部隊が動き回るネットワーク型のものへと大きく変化したのである。また大勢の人間を一箇所に集めてじっくりと時間をかけて戦うという戦法が無効になり、少人数の部隊がスピーディに動くということが何より重要になった。旧来の戦法を金科玉条にしていた国はおおいに敗れることとなったのである。

時代遅れの「標準化」の害

同じような例として、大日本帝国海軍の大

鑑巨砲主義も参考になりそうである。以下に参考となりそうな文章を引用する。

「数学者」と評されていた井上成美中将(のち大将)は、加藤大将と似た考え方をする頭脳明敏な逸材だったが、昭和海軍では、敵が多かった。

新建艦計画の予算を審議するための海軍省、軍令部首脳会議で、その予算案があまりにもお粗末と見た井上は、こんな要旨の意見を述べた。のちに、「明治の頭で昭和の軍備をするのか」と井上が爆撃した、と言いつらされたものである。

『この計画を拝見し、かつ、ただいまの御説明を聴くに、失礼ながらあまりにも旧式で、これではまるで明治・大正時代の軍備計画である。(中略)アメリカの軍備に追従して、各種の艦艇をその何割かにもっていくだけの、まことに月並みのものである。

その間、いったんアメリカと戦争になったら、どんな戦をすることになるのか、その戦は何で勝つのか、それには何が、何程必要なのか、といったような説明もなければ、計画にも表されていない……。

かような杜撰な計画に膨大な国費を費やし得るほど日本は金持ちではないし、仮にこの計画どおりの軍備ができたとしても、こんなことでアメリカに勝てるものではない。同じ金を使うなら、もう少し気の利いた使い方をすべきだと思う。

軍令部は、この要求を一応引っ込めて、とくと御研究になったらよいと思います』

(吉田俊雄『日本帝国海軍はなぜ敗れたか』

文藝春秋、1995年)

軍縮会議離脱後の大戦艦による対米牽制と

いうアイデアは、たとえば、昭和十年版の『海軍要覧』のなかに、「軍縮後日本では現在の亜米利加の艦隊に対しては、『キングコング』の様な軍艦を一隻作つたらどうだらう。亜米利加がいくら強いと云つても、『キングコング』一匹に対しては手も足も出まい」などと表現されていた。ただし、海軍のなかにもこの大戦艦建造に反対する意見もあった。第二次ロンドン会議予備交渉から帰国し航空本部長となっていた山本がそのひとりであった。彼は「巨艦を造っても不沈はあり得ない。砲戦が行われる前に飛行機の攻撃により撃破せられる」と航空第一主義を主張していた。ただし、こうした反対は海軍内で少数意見であり、その後軍縮体制を離脱した海軍は、この大戦艦の建造に乗り出した。そして、1937年7月の日中戦争勃発以降、中国をめぐる日米危機の本格化が予想されるなかで、その国際危局打開の準備工作の筆頭に「大和」の完成時期を「昭和十六年に繰り上ゲルコトニ極力努力ス」ることとしていた。日中戦争が発展拡大して、もし日米の対決となった場合、海軍の頼みはやはり大戦艦「大和」型だったのである。

(相澤淳『海軍の選択 再考 真珠湾への道』

中央公論新社、2002年)

時代遅れの「標準」に固執することの弊害は嘆かわしいほど甚だしい。

「都市」の見直し

さて、現在の都市はどのような転機に直面しているのであろうか。一言で言えば、大都市の時代が終わったということではなかろうか。大勢の人間を一箇所に集めオフィスの中に閉じ込めて経済活動に専念させるという時代は、終わってしまった。大都市の時代と

は、今振り返ってみれば、消耗戦の時代であったとも言える(自然環境、人間、物資の消耗)。それは、大量生産の時代、画一化の時代、人間規格化の時代、人工空間の時代、大組織の時代、内向きの時代、経済重視の時代、であったと表現することも可能であろう。なお、大都市の時代が終わったという認識では未だ不十分であるかもしれない、都市を拠点とする時代が既に終わりつつあるということかもしれないが、この点は今後よく研究してみなければならない。

とりあえず今後重要になるのは、人々が大都市の都心部に閉じ込められることなく自由闊達にのびのびと動きつつ仕事と生活とをうまく組み合わせながら生きることができる環境づくりである。一言で言えば、身体感覚の回復ということになるかもしれない。都市づくりに関しては、経済開発から自然環境保全へ、効率性から公平性へ、競争社会から弱者保護社会へ、重点を大きくシフトさせることが重要になる。

このような時代変化の契機となったのは、ひとつはIT革命のような情報技術革新である。もうひとつは地球環境問題やヒートアイランド等都市環境問題の深刻化である。もはや都市の内の守りを固めるという姿勢では環境は崩壊していく。都市自体も崩壊していく。関心を外部へ向け、都市の外へどんどん出ていくことが重要な時代になった(出ていくものとしては言うまでもなく心が一番重要であるから、結局、それは心の問題である)。

技術革新によって物や人を動かさなくても効率よく経済活動を行うことができるようになったということは、大都市の都心に人や物を集めなくても情報だけ集めればよい時代になったということである。むしろ、物や人を動

かすのに時間をかけず判断をスピーディに行うことが重要になった。その情報ですら集める場所は大都市の都心である必要はなくなった。かつての時代の経済活動は巨大オフィスや大規模交通施設等が支えたが、これからはそれらに対するニーズは急速に縮小するというのが有力な見方になっている。大都市に住む大勢の人々の需要を満たすためのサービスも必ずしも大都市の中にある必要はなくなった。都会の便利過多の生活にこだわらなければ、居住地も必ずしも都市の中にある必要はなくなった。むしろ自然が豊かな都市外を居住地として選ぶ人が増えてくるかもしれない。大都市という形は、経済活動面からも生活面からも今や過去のものとなりつつある。

一方、自然環境の急激な悪化を真剣に考えるならば、都市の中に人工物を積み上げていくという方向は行き詰っている。これからはコンパクト・シティといったような場で、大仰な人工物を伴うことなく自然の近くで軽快に生きていくことが新しいライフスタイルになるかもしれない。上記の技術革新もそのような方向で最大限に活用することが求められるであろう。

以上の諸点に関しては、ロジャース+グムチジャン『都市 この小さな惑星の』の中の次の記述が大変参考になる。

現時点では、私たちは、人々を自由にし文化的にさせる都市というよりは、人々を分裂させ暴力的にさせる都市を作り続けている。しかしながら、私たちの自然環境に対する態度が最近革命的に変化したことは、有益なモデルを提供する。エコロジストたちが描く私たちの自然との関係 - 私たちはその持ち主では

なく付託をうけた管理人にすぎず、将来の世代に対して責任をもっているのだということ - は、都市における社会生活にそのままあてはまる。(中略)

新しい技術は、学習や労働をかつての場所性の束縛から解放した。ネットワーク化され、しかも柔軟に情報源に接続できることが、昔日の諸活動 - 例えば、工場、オフィス、大学 - の明確に切り離された境い目をなくしつつある。人々はますます、知識を、それが組織化されたところではなく、それが欲しい時に使うようになっていく。家、カフェ、公園、どこからであろうが人々はプラグインし、参加することができるようになる。(中略)

21世紀の都市では、小規模な雇用と創造的な交流をよりどころにした経済が、より一層多様で個人的なニーズを生み出すであろう。小企業は、大規模な業務施設基盤への依存を弱め、むしろ都市のインフラや地域で提供されるサービスに依存するようになる。大規模な企業の活動から、小規模な企業のネットワークへの重点の移動は、人々が大規模で変動の少ない集団で働く必要性を弱めさせ、都市全域に分散された就業場所を出現させることを促す。

(リチャード・ロジャース
+ フィリップ・グムチジャン

『都市 この小さな惑星の』

鹿島出版会、2002年)

この最後の点は、20世紀的な大都市の都心一極集中の時代が終わり、都市全域に薄く広がるコンパクトな都市内都市が出現する時代になることを意味する。

コンパクト・シティとは何か

ここで少しコンパクト・シティの意味を考えてみたい。その意味を考える際に最も重要なことは、過去の「標準」でコンパクト・シティを考えてはならない、言葉だけを新しくして発想が古いままでは事態はかえって悪化する、ということである。

過去の「標準」であった考え方とは、高度化、高密度化、効率化等の言葉で表されるものであろう。「コンパクト」とは、「詰め込んで固める」という意味があるので、その意味では大都市の都心の超高層化も「コンパクト」と言えるかもしれない。しかし、コンパクト・シティが意味するものは、そのようなものとは全く異なる。ロジャース+グムチジャン前掲書には次のようにある。

コンパクト・シティは、公共交通機関のノード(結節点)に位置する社会的・商業的活動の中心まわりに発達する。それらの中心は、近隣界限(neighbourhoods)が育まれる焦点となる。コンパクト・シティとは、それらの近隣界限のネットワークであり、それぞれが公園や公共空間を持ち、プライベートな営みと公共的な活動の多様な混じり合いを生み出す。(中略)最も重要なことは、これらの近隣界限が、コミュニティの至近距離内に雇用を生み、種々の施設を呼び込むことであり、その近接性は、日常生活において車を運転する必要性を減らすことになる。大きな都市では、これらの近隣界限の中心を相互に繋ぐ大量交通機関がまちの間的高速移動を可能にするとともに、地域独自のシステムが近隣交通を担う。こうすることによって、通過交通の量や影響が特に近隣界限の公共的な中心部まわりで減り、それらを緩和しコントロールすることが可能になる。地域の路面電車や、簡易鉄道(Light train)、電気バスがより効

率的になり、自転車や散歩はより快適になる。街路における混雑と汚染は劇的に減少し、公共空間における安心感や賑わい感覚は高まる。

このような環境は、何でも集中的に詰め込むという発想では生まれない。良好な近隣境界が形成されるためには、人口や経済活動の適度な密度と諸機能の適度な組み合わせとが必要である。特定の機能が集積されたために他の機能に過大な負担がかかるなどというコンパクトさは、コンパクト・シティの姿とは程遠い。

近代の見直し

古い時代の考え方を基礎とする技術論や制度論で「標準化」された考え方は、時代の大きな変化の下で無効になる。そして一度無効になると、それらに固執することは無意味であるどころか大きな被害をもたらすことになる。しかし、戦争であれば勝敗がはっきりするので危機が明白に意識され速やかな転換もできるのであるが(できなかった国もあるが)、そうでない場合は危機が見えにくく惰性で古いものを引きずることにもなる。

例えば、かなり以前から都市間競争なるものの重要性が叫ばれ今ではかなり陳腐な言葉になってしまったが、それは今でも重要なのであろうか(そもそも今でも「都市」間競争として考えるべきものなのか)。今や経済は国家間の競争ですらなくなりつつある。場合によっては組織間の競争ですらない。

地球環境問題等の環境問題の方が経済競争よりはるかに重要な課題になっている。経済競争と都市づくりとは何らかの形で切り離していかないと、都市どうしが競争してい

る間にお互いの環境が崩壊するなどという愚かなことにもなりかねない。

「近代」の意義そのものが問われている。これは「標準化」という考え方を根本から見直すということでもある。ここで重要なのは、政策の内容を単純に入れ替えるということではなく、発想そのものを改革するということである。これまで見落としてきたものを制度論、技術論の対象として新たに取り上げることは、もちろんある程度は必要なことではあるが、それは新たな「標準化」でもある。場合によっては、発想が20世紀的なものから脱却できず、単に言葉だけを入れ替えるということにもなってしまう。気がついたら身の回りのものがさらに「標準化」されていて何だか息苦しい、ということにもなりかねない。

「標準化」の弊害が大きくなるのは、それが人間や自然に当てはめられた時であろう。例えば人間については、「動物化」、「家畜化」、「ペット化」が進行していると言われるが、その大きな原因は「標準化」にあるのではないか。また自然に関しては、例えば流通業界がコストを低減させるために野菜や果物などの形や大きさを規格化し、それにあわないものは商品価値なしとして排除するとの話があり、これに関しては生産地である発展途上国の人々が憤っているとの話もあるわけだが、企業レベルでの利益は地球規模では不利益になるということが現在の大問題である。

「都市型社会」の意味

以上のことがらはもちろん都市についても言えることである。都市のつくり方についても一度その根本を考えてみる必要がある。 「標準化」とはすなわち「揃える」ということであるが、それをどの程度都市づくりに用いる

べきか。例えば景観などはどうか。揃えれば美しくなるということではない。

建物の形や色が揃った古都の古い街並みはある種の価値を持っているような気がするが、それと都市の風景の美しさとは必ずしも同じではない。本研究では、都市の風景の美しさとは、先にも述べたように、倫理を内包するものであると考えている。それは、そこに住む人々の心の美しさと一体となったものである。都市の人々が持っていなければならぬ心の美しさとは、都市という社会を成り立たせるための心の美しさ、すなわち、公共心である。

少し具体的に言えば、公共心のある人々がしないであろうことは、内に固まること、態度に裏表をつくること、外部の人間を差別したり排除したりすること、讒言すること等である。このようなことを軽蔑する心を持った人々の集まりが都市であり、都市の風景の美しさとはそれを基礎にできあがるものである。心が外に開かれた人々が外に開かれた都市の風景をつくる。それは、街の形が揃っていることとは次元がまったく異なる。

もちろん、このような完全な市民がつくる完全な都市など今まで存在したことはないであろうし、これからも存在するとは思えない。人間が動物である以上自己の利益を最優先する気持ちが消えるはずもなく、普通の人間であれば公共心半ば、利己心半ばというところにまで到達できれば良いほうであろう。しかし、ここが肝心だと思うのであるが、市民である以上公共心を拡大させなければならぬという問題意識をしっかりと持つことが都市づくりの必須の条件である。そのためには、現在の自分たちは公共心が不十分である、言い換えれば信用できる部分と信用できな

い部分とが相半ばしている、ということをしっかりと認識することが必要である。それは自分のためのみならず他人のためにも大切なことである。ちなみに春海二郎はこの点を「醒め加減」のよさとして以下のように述べている。

最近、英国の MORI という世論調査会社が行った「職業別信頼度調査」なる世論調査によると、サンプルとして挙げられた13の職業のうち政治家はビリから2番目で、信用度は100点満点の20点となっている。(中略)堂々最下位、つまり最も信用されていなかったのが「ジャーナリスト」で、信用度は18点であった。(中略)

庶民にすり寄ったふうな番組を見て、拉致被害家族に対して批判の言葉を投げつける人たちの無神経さはかなり許しがたい。この人たちは、以前にイラクで人質になった若者たちの家族に対して「自業自得」と罵声を浴びせた人たちと酷似している。(中略)この種の「普通の人」たちも、私を滅入らせるもう一方の人たちだった。日本では「普通の人たち」は自分たち自身をどの程度信用しているのだろうか。(中略)

先ほどの英国の調査には、さらに「庶民」(ordinary people)という項目も用意されていた。その信用度は53点、第7位である。調査対象が庶民であることを考えると、英国の庶民は自分たちをそれほど尊敬しておらず、結構醒めた目で見ているともいえる。この「醒め加減」がいいと思ったりする。

(春海二郎「英国の庶民から最も信頼されていない人々」週刊東洋経済2004年6月19日号)

都市の風景の美しさを人々の心の美しさ

ととらえるならば、その風景の本質とは揃っていないのに美しい、あるいは揃っていないから美しい、ということではないかと思われる。「美しい」は「標準」からはみ出した「個性」に宿る。揃ったら「美しい」はなくなる。風景を考えるとすることは、要するに近代を見直すということでもある。これは上から「律する」とことは次元の異なる考え方である。この点に関してはしばらく前からの「縄文ブーム」が参考になる。それは日本における本来の風景の美しさを見出そうとする動きでもあるように思われる。

弥生的な美は縄文的な美の中のごく一部に採り入れられるからこそ、すっきりとした潔い美しさを表現することができる。これは背景があるからこそ成り立つ美である。つまり、その美はそれ自体が成り立つための本質的なものを背後におしやって成り立つ。この点に関しては橋本治がとても面白いことを言っている。

縄文と弥生がどう違うかという、縄文は「芸術」で、弥生は「生活」なんですよ。(中略)縄文の火焰土器って、土器の周りに上がってる炎がそのままフォルムになったようなものでしょう。となると、火焰土器は、自分達の生活と、炎に包まれた神聖な空間とが渾然一体となった、とっても具体的で合理的な宗教祭器なんだよね。

ところが弥生は、生活と宗教祭器が結びつかない。(中略)土器と火が別々に分かれちゃうんだ。(中略)面倒くさくて、ややこしいものは、全部下の竈に押し込んで。 (中略)

弥生の生活に神がないのに対して、縄文というのは、集落の中に神がいて、みんな神とともに生きている。(中略)神と一緒にいるという

ことは、一人一人が現実生活のうちに、現実とは別の或るなにかを見るということで、そうするとみんな芸術家になるんだよ。見たものを表現しちゃうから。

言うなれば、縄文人は個人主義の放浪者で、弥生はきちんとした生活設計を持つ共同体だね。共同体って餅みたいなもので、形のあるものを搗いて搗いて、ぐちょぐちょねばねばにした上で丸くまとめるという、そういうへんなものでもあると思うな。

(『芸術新潮』2003年10月号)

目に見える形からすると逆のようにも見えるが、実は弥生は農村型社会で縄文は都市型社会である。

これからは個人の知恵を生かす時代であり、また、スピードの時代でもある、とよく言われるが、そうであるならば、弥生ではまずいであろう。「丸くまとめる」ということでは個人の知恵は生かせないし、「ぐちょぐちょねばねば」では足をとられてスピードも出ない。

さて、以上をまとめると、これからはめんどろなことを外部におしやって自分たちばかりすっきりするような、「ウンコ」は下へ「祈り」は上へ、という態度では駄目だということである。新しい社会は、上へも下へも大きく開かねばならない。広く外とつながらなければならない。しかし、最近は内にこもる傾向がますます強くなっている。それは低年齢の子供にまで広がってしまったさまざまな事件を見るだけで十分感じるすることができる。その傾向は大人の中でも広がっているし、また国際的にも広がっている。現代は都市型社会と言うよりむしろ田舎型社会と言うべきかもしれない。

誤解を生じるといけないので、ここで用い

ている田舎型社会と都市型社会との定義を示しておこう。田舎型社会とは、世間がある社会である。つまり、人々の行動規範が事前に決まっており、人々はそれを気にしながら生きていく社会である。例えば2人の人が議論をする場合、彼らは相手の意見を熟考した上で自分の意見を述べる、ということはない。相手の意見よりも世間の反応をまず気にする。相手は世間ではこれこれこういう評判の人間だから、自分が相手に言うべき言葉はこうでなければならない、という具合に世間体をまずは気にする。周囲の人間の顔色を気にする世界である。対話を通じて自分たちが世界をつくっていくのではなく、世界は世間に抑えられている。

それに対して都市型社会とは、対話を通じて相互理解を深め、それを基礎に自分たちが公共の概念を形成し、それに結び付けてひとつの世界を形成する社会である。上から抑えられる社会ではなく、下からつくる社会である。そのような社会を形成する資格のある人間、すなわち市民とは、どのような人間をいうべきであろうか。例えば、前回会った時には愛想がよかったのに、次に会ったときにはそっぽを向いている(その間に「世間」の評判が変わったのであろう)、などという人間は、市民にはなり得ない。もちろん都市を論じる資格はない。

仮想現実、制度現実

さて、仮想現実の中で夢ばかり見るようになってしまうと、本当の現実を忌むようになる。あるいは仮想現実を守るために本当の現実を攻撃、破壊するようにすらなる。さまざまなフィクションに基づいて現実世界を破壊する。しかし、これは逆説的だが、仮想現実ではな

く本当の現実を見ていても、それが利害関係のある狭い範囲の現実であれば、それは次第に了見の狭い制度現実に陥り、その制度現実を守るためにやはり本当の現実を攻撃するようになる。これは狭い世間ばかり見ている大きな社会を見なくなるということであるから、社会の田舎化である。あるいはもともと都市などなかった、という意見もある。

制度現実とは、内にこもった組織が守ろうとする現実であるが、そのような組織のことを原田泰は「自転する組織」と呼んでいる。そして、原田はそのような組織が「虚構の世界」に入ってしまう問題を山本七平『下級将校の見た帝国陸軍』の書評で次のように述べている。

大言壮語の割にいっさいが旧式で、やっと第一次世界大戦の水準。一点豪華主義のような象徴的新兵器はあったが、宙に浮いていた。弱みを見せまい、自らも見まいという心理が、大言壮語となり、事大主義と重なって、リアルにもものを見ることができなくなっていたという。

帝国陸軍は、無意味・無目的の自転を始め、その「自転」が無意味でないことを自己に納得させるために、虚構の世界に入ってしまう。それが虚構でないように見せる演技が、「気迫誇示」であり、「事実」を口にした者には、罵詈誼を加えて、その口を封じていた。(中略)

砲を捨てようものなら砲兵将校は自殺を強要され、自殺を強要した組織の長は生き延びている。自らがデッチ上げた「無敵」という虚構に自分が振り回され、事実を指摘する人びとに罵詈雑言を浴びせ、無辜の民の血を流しつづけた。

帝国陸軍が必死になって占領しようとしている国はじつは日本国であったと著者はいう。米

国と戦う気がなかったのは当然だ。帝国陸軍に占領されていた日本人は、米軍の占領をイラクの住民よりも好意的に受け入れた。

かくもお粗末な組織に日本人はなぜ支配され、その組織やそのトップを尊敬すらしていたのか。

(原田泰「名著再読 山本七平著『一下級将校の見た帝国陸軍』」週刊ダイヤモンド2004年7月3日号)

「虚構の世界」の中で「自転」するのは、「おたく」だけではないのである。あるいは、社会が全体的に「おたく」化しているとも言える。

自分の夢(仮想現実)に踏み込まれた子供が引き起こす事件と、制度現実(現実)に踏み込まれた大人が引き起こす陰湿な行為とは、結局のところ同根である。すなわち現実を率直に見ようとしないうえに未熟で幼稚な心(心)がその根底にある。世界を率直に見ようとしないうえに、自分たちの都合の良いように世界を見る、ということは要するに公共心が欠如しているということで、そのような人間が集まっている所はおよそ都市社会とは呼べない。

都合の良い所ばかり見るということは、都合の悪い所を陰におしやるということである。夢も制度現実も、表あるいは陽ばかりを大切にして裏あるいは陰を見ようとしないうえに。これは人間が自然の中で生きていく上で極めて不自然で長続きすることではない。表がいくら金ぴかに輝いていても、裏ではやはり紙が必要になる。

市民の生活実態を省みることなく裏を表にしようなどという無謀なことを考えれば、西洋都市のようなことになってしまう。すべてに陽が当たるようなことを企てれば、生理的に

耐えがたく苦しいことになる。陰を追い払って陽を拡大する類の都市開発があるとすれば、それは美的でないばかりか生理的にも耐え難い。

本当の現実(現実)すなわち環境から切り離された夢あるいは制度現実(現実)を追求することはもはや限界(限界)に来ていることを我々は知るべきであろう。それらを環境から切り離して、そこにだけ生きがいを見出すような内向き、後ろ向きの姿勢に陥ってしまえば、「自分が構築した」(つまり現実から遊離しているからそのつもりになっている)部分を批判されただけで事件を引き起こす。仮に攻撃されなくとも、自分がいい気分(気分)でいるうちに現実(現実)はどんどん劣化(劣化)していき、結局は自分の生存すら危うくしていく。

制度論、技術論の難しさ

制度論、技術論はどうあるべきか、標準化はどうコントロールすべきか、あるいはコントロールすべきでないか、ということを考えることが今こそ重要になっている。標準化の原動力となったものが数量化と視覚化とであったとするならば(クロスビー『数量化革命』紀伊國屋書店、2003年)、数えられないもの、目に見えないものを改めて大切にするという視点も必要である。

標準化は経済効率(効率)を著しく高め、近代産業に参与する者(者)に対しては多大な恩恵(恩恵)をもたらした。しかし一方、国内の伝統産業等に従事する者(者)や仕事を奪われる者(者)(効率化は労働力を機械に代替する)、産業近代化に取り残された海外の国や地域に生きる人々(人々)に対しては誠に大きな犠牲(犠牲)を強いた。そして近代化の推進(推進)はかなり以前から地球環境(地球環境)をも崩壊(崩壊)へと導き始めた。今求められているの

は、この反省である。すなわち、標準化を批判的に見ることである。それは、その背後にある数量化重視、視覚化重視の姿勢を改めることでもある。前回は記述したように、都市に関しても今や目に見えないものの重要性を認識すべき時に来ている。また、前述のごとく、政策評価においても数量化できない要素をきちんと評価することが必要である。

数量化できないもの、目に見えないものの代表としては、ゲニウスロキがある。これからの都市づくりにおいてはこのゲニウスロキを重視することが重要である。ゲニウスロキは、言うまでもなく制度や技術で把握できるものではないし、そのようなもので把握すべきものでもない。要するに、これからの都市づくりにおいては制度論、技術論の視野に入っていない要素を重要視しなければならないのである。本研究のテーマとした都市の風景とは、このような次第で、制度論や技術論でとらえられるものではないし、とらえるべきものでもないし、とりあえずとらえるつもりもない。風景を何らかの形で制度化しようなどということになれば、そしてこれは東洋ではなく西洋の価値観にいかにも親和的だと思うが、それは風景ではなくなっていく。

これまで見落としてきたものを見直そうということでそこに新しい制度が設けられたり新しい技術が適用されたりすると、とりあえずは失われつつあるものが保全されるような気もするが、実はそれは喪失の徹底化という性格も持っている。これからは制度や技術に取り込まれないものを自然に生かす方法が考え出されなくてはならないが、その方法がまた制度や技術ということになりがちなので、これは大変難しい問題ではある。

哲学論、現象論の難しさ

江戸の都市の美しさが外国の人々から賞賛されたことは多くの人々が語る場所であるが、また、20世紀の都市づくりがその美しさを徹底的に破壊してきたことも多くの人々が語る場所である。その原因はどこにあるのか。近代化や戦災復興が急務であったからなどという表面的な説明ではすまないことは、ドイツの都市と比較してみればよくわかる。人間の心根の違いにさかのぼって考えるべきであろう。

江戸時代の人々には深い人間理解と自然に対する謙虚さがあった、と言われている。制度論、技術論などというテクニカルな知恵よりも人間の生き様を尊いものとしたということで、つまりは人間の心に豊かさがあった。テクニカルなものについても、実用的なものほど価値があるなどという皮相的な考え方は今日に比べればよほど小さかったものと思われる。豊かな文化とはそのようなものである。芸術ですら人間精神を深めるものではなく国に利益をもたらすものとして扱ったらしい明治の考え方とは、ずいぶん違いである。

今日多くの人々が日本の都市の姿は恥ずかしいというが、その際恥ずかしいと思う内容は心の貧しさであるに違いない。つまり外面の問題ではなく内面の問題である。内面が豊かであるなら外面などそうそう気にするはずもない。内面が貧しく外面だけ取り繕うようなことになればますます恥ずかしくなる。

制度論、技術論に比べて哲学論、現象論が著しく立ち遅れた20世紀は終わった。これからは制度論、技術論の上位に哲学論、現象論を置かねばなるまい。「近代」が終わったということは、制度の時代、技術の時代が

終わったということでもある。もちろんいつの時代でも制度や技術は必要だが、それらをコントロールするための哲学論、現象論の重要度が格段に高くなった。哲学論、現象論をもとに頭脳が判断し、その判断に従って技術論、制度論を道具として手足が動くという本来の姿に戻り、都市再生の策を通じて静かで落ち着いた趣のある都市が復活することが期待される。

もちろん手足(身体)がなければ認識は成立しないのであるから(つまり映画『マトリクス』の世界は現実には成立しない)、頭脳と手足とのフィードバック関係は重要である。その場合、手足が身体感覚を保持していることが当然のことながら大前提となる。つまり手足が外の世界につながっていなくてはならないのであるが、現代社会においてはその身体感覚が失われてきているという。

ここでこんなふうを考えられないだろうか。人間においては「自然」がとうのむかしに壊れてしまっているので、ひとはそれを他人との共同生活のなかでかろうじて繕ってきた。かろうじてバランスをとってきた、と。(中略)が、その「自然」の燃えかすのようなものさえ、ひとはいままで服でも脱ぐように、消去したがつている。どうしてなのか。

ともあれ、いま、わたしをもふくめて、少なからぬひとたちが、じぶんの「自然」を傷つけることなしにはじぶんの存在を確認しにくくなっているというのは、どうもたしかなようだ。食べるという行為は、じぶんにたいする暴力となりうる。食べることで、あるいは食べることを拒否することで、ひとはなにを破壊しようとしているのか。なにを贖おうとしているのか。若いひとたちから年配のひとにいま確実に広がったあのピアシ

ングもそう。身体に穴を開け、金属をそこに差し込むこの習俗が、縄文以来という、じつに長い忘却のあとでいま甦った。みずからの身体を毀損することでしか手に入れることのできないものとは、いったいなんだろうか。(中略)

あるいはこれを、「自然」の、とりわけわたしたちのばあいには身体の、観念化と表現することもできるかもしれない。身体が過剰に観念に憑かれてしまい、観念でがちがちに硬直している、つまり身体に本質的なある(ゆるみ)を失っている、だからとても脆くなってすぐにポキッと折れそうなのだ……と。

(鷲田清一『悲鳴をあげる身体』)

PHP 新書、1998年)

身体を「標準」に押し込めねばならぬという強迫観念が「ゆるみ」を奪う。「ゆるみ」とは「ゆらぎ」であり「すきま」である。「美しい」の源である。それを「美しくなる」ために自ら奪おうとする。美しく生きようとするために美しくなくなり死んでいく。恐ろしい事態である。ヨーロッパの都市のように美しくなろうとした20世紀の日本の都市のようである。

自己存在の確認のために「自然」を傷つける、「道具」を使う。これは政策に関してはどうか。政策の手足が、外の自然に対応するために道具を使うのではなく、自分の存在意義をアピールするために道具を使いだしたりすると大変である。技術論や制度論がこれまでさかんだったのはそんな理由ではないとは思いますが、もし将来そんな理由で手足が動き出すとするならば、それは身体感覚の喪失に由来するものであるかもしれない。

社会を解体させないために

技術論、制度論が先行して個々に動けば、社会は解体に向かう可能性すら出てきた。この点に関してはリオタールの次の言葉が参考になる。

テクノサイエンスは成功以外の判断基準を認めない。ところが、それには、成功とは何なのか、なぜ成功は良く、正しく、真であるのかも、言うことができない。というのも成功とは、その法則が知られてはいないひとつの承認としてのみ、確認されるものだからだ。したがってそれは、普遍性の実現という計画を達成することではなく、その反対に、正当性解体のプロセスを加速する。

(リオタール『こどもたちに語るポストモダン』

管啓次郎訳、ちくま学芸文庫、1998年)

このような「テクノサイエンス」が個々に勝手な動きをすれば、社会が解体するのも必然である(もちろん必然的な偶然かもしれないが)。

近代が終わった今、求められているのは目標となる絵を描くことではなく進むべき方向を提示することであろう。これからの都市づくりにおいて本質的に重要となる視点を、以下に同書から引用しておく。

いま現に存在するものの、それも結局のところ卑小な擁護者としての役目をはたす者となってしまうことを望まないのであれば、画家と小説家は、意識を懐疑から守るという治療的職務を拒絶しなければならない。かれらが先行者から学び受けついできたような、描く技術、語る技術の諸規則を、問いなおさなくてはならない。そうした諸規則はやがてかれらの眼に、かれらが<誠実である>ことを禁止するような、

人をあざむき、誘惑し、安心させるための手段として映ることになる。絵画あるいは文学というおなじ名をあいかわらず名乗ってはいるのに、前例のない亀裂が生じたのだ。芸術の諸規則を再検討することを拒む者たちは、<良い規則>にしたがって、慢性的な本当らしさへの欲望と、その欲望を満足させることのできる対象ならびに状況とをむすびつけながら、大衆のコンフォルミズムのなかで成功を収める。(中略)

モダンの美学は、崇高の、しかしノスタルジックな、美学だ。その美学は提示しえないものがただ不在の内容としてのみしめられることを許すのだが、形式のほうは、そのはっきりとわかる一貫性のおかげで、読む人や見る人に、なくさめやよろこびの素材を提供しつづける。ところで、これらの感情は、快感と苦痛の内在的結合である、真の崇高の感情をかたちづらない。その理由があらゆる提示を超えてしまう快感と、想像力や感受性をもってはその概念に対応しきれないような苦痛の。

ポストモダンとは、モダンの内部において、提示そのものの中から「提示しえないもの」をひきだすような何かのことだろう。不可能なものへのノスタルジアを共有させてくれる趣味のコンセンサスの上にたって良い形式からもたらされるなくさめを、拒絶するもの。新しいさまざまな提示を、それを楽しむためにではなく、「提示しえないもの」がそこに存在するのだとより強く感じさせるために、たずね求めるもの。ポストモダンのアーティストや作家は、哲学者としての立場にたたされている。彼が書くテキスト、彼が作り上げる作品は、原則として、すでに存在する諸規則によって支配されてはならず、そのテキスト、その作品に対して既知のカテゴリーを適用することによる、規定的判断によっては、判断されえない。それらの規則やそれらのカテ

ゴリーこそ、その作品あるいはテキストが探し求めているものなのだ。したがって、アーティストならびに作家は、規則をもたないまま、「これからなしとげられてゆくであろうもの、そしてできあがってみてはじめてわかるもの」の諸規則を確立するために、仕事をするわけだ。

人類の普遍的歴史の物語りは、神話というモードをもっては確認されえない、それは実践的理性の「理想」(自由、解放)へと宙吊りにされたままにとどめなければならない、それは経験的証拠によって証明されることができない、そうではなくてこの理想が精神の中に現前していることを経験においてしめす間接的記号、「アナログ」[アナログ(類推物)の複数形]によって証明されるだけである、そしてこの歴史をめぐる討論はカント的な意味で<弁証法的>である、つまり結論はない、というものだろう。

ただひとつたしかなことは、権利は事実から生まれるものではないこと、そして、現実の社会はその正当性を自分自身から引きだすのではなく、それ自体としてはそうと名指すことのできない、けれども必要な、ひとつの共同体から引き出す、ということだ。(中略)

それこそ、すでに言ったように、現実の共同体の解体の誘引が、共和制原理とそれが展開する歴史のうちに記入されて存在することの理由だ。主権は民衆にあるのではなく、自由な共同体という「理念」にある。そして歴史とは、まさにこの欠如が生む緊張を刻印するものにほかならない。共和制は安全に対抗してでも自由を選びとる。(同)

この指摘は、都市づくりの今後の方向を考える上で大変参考になるであろう。

以上が今後の都市研究に期待される3つ

の論点であるが、これらを十分に議論しようとするならば、まずは思考の起点を定めるために何らかの哲学(倫理)を持たなければならない。

2. 問題提起

以上の論点を踏まえてここでひとつの問題提起をするならば、それは「都市づくりの目的とは何か」という、誠に深遠な、あるいは極めて時宜を得た、もしくは何の変哲もない問いになる。

目的としてとりあえず思いつくのは、快適な空間をつくる、安全な環境をつくる、潤いのある街並みをつくる、美しい景観をつくる、市民が主体的に活動できる街をつくる、等々である。だが、果たしてこれらは本当に目的だろうか。

例えば近代経済学では、人々の効用を最大化するという類のことを目指してきた。他の「近代」の「学」もそれに類するような目標を設定してきたであろう。それらはもちろんそれぞれ意味のあることである。しかしそれらの個々の目標を並べたところで、都市づくりの究極の目的にはたどり着かない。

例として「快適な空間をつくる」ということを考えてみよう。都市を快適にするということが、都市づくりの目的たりうるか。家畜小屋を快適にするのは、快適にすることが目的ではない、ということは誰でもわかる。それでは都市を快適にする目的は何か。家畜小屋を快適にする目的と都市を快適にする目的とはどう違うのか。都市の商品価値、経済力を高めることが目的だ、などと言うのであれば、その発想は家畜小屋経営に近いのではないか。

ここで容易に想定される答えは、次のようなものである。すなわち、都市を快適にする

のは快適な環境の下で人々が生き生きと生きられるようにするためである、あるいは、これからの経済は知恵の時代だから快適な環境下で創造性を発揮してもらい都市の国際競争力をつけるためである、等々。しかしこれらがあまり意味のない答えであることは、国際競争力などという手段の話に陥ってしまうことから容易に想像できるのではないだろうか。

我々が政策に関して何気なく用いている言葉は数多い。快適、安全、潤い、美しさ、国際競争、マーケット・メカニズム、グローバルizm、ユニバーサル・デザイン、……。よく考えてみれば、これらは一種のシミュラクルのようでもあり、場合によっては一種の言葉遊びのようでもある。ただし無難な言葉ではある。リスクをさけてそつのない文章を書くのであれば、なかなか役に立つ言葉である。しかしそこからは何も生まれない。

これらの言葉をいくら手を変え品を変え使ってみたとところで、目的に接近したことにはならない。もちろんこれら自体は政策の内容としては意味のあることではあろうが、それは目的としてではない。例えば「快適」が目的になると、その追求は無条件に肯定されてしまうところがある。あるいは、こういう時局下だからなどと言われると無条件に否定されてしまうところがある。

意識が内向きになると、自らリスクを冒してまで何かを追求したいと思うことがなくなり、どこからも非難されない類の制度論、技術論を無難にやることにもなってしまう。そのような制度論、技術論が先行すると、それらで対処しうる哲学や現象しか視野に入らなくなる。入らないものは排除しようとする。思考が本末転倒になってしまい、現実からかい離れた

思考しかできなくなる。この現象は「サブカルチャー」におけるものと共通するものがある。都合の悪い哲学論、現象論は見たくないという気持ちが強くなる。

快適、安全、潤い、美しさ等を超えたところで都市のあり方を考えないと、もはや都市社会を維持することが難しくなるのではないだろうか。都市づくりの目的を考えるとということは、社会のあり方を総体的に考えるということである。それぞれがそれぞれの専門分野だけ考えていけばよいということではない。

都市の社会はいかにあるべきか、という思考が、これからの都市づくりには必要不可欠である。それがきちんと認識されていれば、快適の条件が自ずからはっきりしてくる。こういう快適は求めるべきで、こういう快適は求めるべきではない、というように。場合によってはあえて快適でなくすることに意義が見いだされる。例えば安藤忠雄の住吉の長屋などがその良い例であろう。快適を目的としたら発想されえないものである。

ということで、ここは問題提起だけで終わってしまう。筆者がつまらない考えを示すより、読者が考える方がはるかに意義のある答えが見つかるであろうから。

おわりに

都市理解は20世紀を通じて次第に表層的なものになってしまった、我々は本当の都市の姿を見ていない、やがては都市が社会を崩壊させる、というような議論があるが、もしそれらが正しいとするならば、問題は制度論や技術論に比し哲学論、現象論が立ち遅れたことにある。これは前回述べた「実践的な「学」が大変な人気を集めている」ことと同じ問題である。要するに倫理が視野から消え

た。その結果、例えば快適を追求することが無批判的に肯定され、快適とは何のためのものなのか、なぜ快適を追究しなければならないのか、快適とは何かという問いが消えた。都市に住む以上日照はある程度我慢しなければならない、などという妙な主張が出てくると、何となく反論しにくくなった。

制度論、技術論(とりわけ欧米由来のもの)はなお盛んである。研究と呼ぶにふさわしい分析的なものもあれば単なる紹介論的なものもある。中立的なものもあれば結論先取りのものもある。優れた研究は概して制度論、技術論の基礎として何らかの哲学論、現象論を置いている。そしてそれらの論は、特定の利害関係にとらわれず広く公共の利益の視点で展開されている。そのような哲学論、現象論が十分に展開された上での制度論、技術論には優れたものが多いが、残念ながら哲学論にまでさかのぼった研究はあまり多くはないように思われる。

都市とは私の上に公(市民の)があってはじめて成り立つ社会であるとすれば、その研究のあり方に関しても公の視点の有無が厳しく問われる。今は、その公のあり方自体も問われており、その問いは都市とは何かという問いにつながる。つまり都市研究の目下の重要課題もそこにある。「都市の正体」をつかむことが今何より重要であると前回書いた趣旨もそういうところにある。そして、このような問いに答えるためには何らかの哲学論が必要になる。

これからの都市論においては、制度論、技術論と哲学論、現象論とのバランスを回復させることが重要である。それは、都市論の深みを回復するためばかりでなく、都市が世界を崩壊させないためにも必要である。哲学

論、現象論で視野を広げることが、都市にとっては何かにさしせまった問題になっている。制度論、技術論は極めて重要だが、いきなりそこから始めては視野は自ずから狭くなる。新しい概念を創り出す必要性は視野に入りにくくなる。前回述べた「枠を超える」ということは制度論、技術論だけではなかなか起こり難い。利益論、効用論、便益論、機能論、経済論、原因結果論を超えた議論が必要になっている。

参考 街の風景(2) 東京高いところから

はじめに

今年の夏は、暑かった。地球規模での気候変動の影響とも言われるが、ヒートアイランドも激化していると言う。その大きな原因のひとつは、建築物の高層化であるらしい。

暑さの中、東京の都心を歩いていると、体が融けてしまいそうに感じる。そこは次第に人間という生物が生息できる場所ではなくなりつつあるような気もする。地面からの激しい熱気は、なんのゆらぎもなく上に真っ直ぐ昇ってくる。風がないためである。芝浦あたりでは東京湾からの風が断続的に冷気を運んでくれるので、未だよい。ところが新橋、銀座あたりにくるともう風がなくなり、まるでフライパンの上を歩いているようになる。

気がつけば東京湾近辺に集中的に超高層ビルが建ち並んでしまった。やはりこれがヒートアイランドの大きな原因なのだろうか、という疑問から、あちこちの高いところに登って東京の景色を眺めてみた。今回はそこで撮影した写真の中からいくつかを掲載する。東京の景色がどうなっているか、感じていただきたい。

1. ヒートアイランドの特徴

写真を掲載する前に、ヒートアイランドの特徴がよくわかるような資料をいくつか掲載しておきたい。

次の図表2つは梅干野晃「都市の熱環境」(紀谷文樹『建築環境設備学 新訂版』彰国社、2003年)からの引用である。東京の都心と郊外との気候差を示したものであるが、都心は風速が弱く、気温は高く、湿度は低いことがわかる。

図表1 都心と郊外の気候差

放射*	
純放射	15~20%減少
紫外線(冬)	30% //
紫外線(夏)	5% //
日射	5~15% //(25~30%減少)**
気温**	
年平均	0.5~1.0°C高(2.5°C高い)**
冬の最低	1.0~2.0°C //(3~4°C高い)**
相対湿度**	
年平均	6%減少(10%以上減少)**
冬季平均	2% //
夏季平均	8% //
雲**	
雲量	5~10%増加
霧(冬)	100% //
霧(夏)	30% //
降水量	
日降水量 0.5mm以下の日数	10%増加(15~20%増加)**
雪	5%減少
汚染物質**	
巨大じん埃粒子	10倍(10倍以上)**
CN	15倍以上
dust	10倍
SO ₂	5倍(10倍以上)**
CO ₂	10倍
CO	25倍(50倍以上)**
風速**	
年平均風速	20~30%減少
極値	10~20% //
静穏度数	5~20%増加

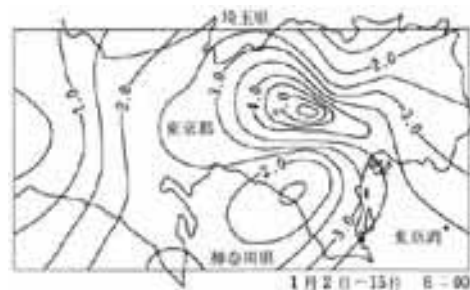
* 1 H.E. Landsberg: 1970, Meteorological Monographs, Vol. 11, p.91, table 1

* 2 神山恵三の資料

* 3 河村武の資料(東京の場合)

(出典) 梅干野晃「都市の熱環境」(紀谷文樹『建築環境設備学 新訂版』彰国社、2003年)

図表2 東京の都心・郊外気温差



(出典) 図表1と同じ。元資料は、岡建雄「都市の熱的空気環境」(建築雑誌、1987年1月号)

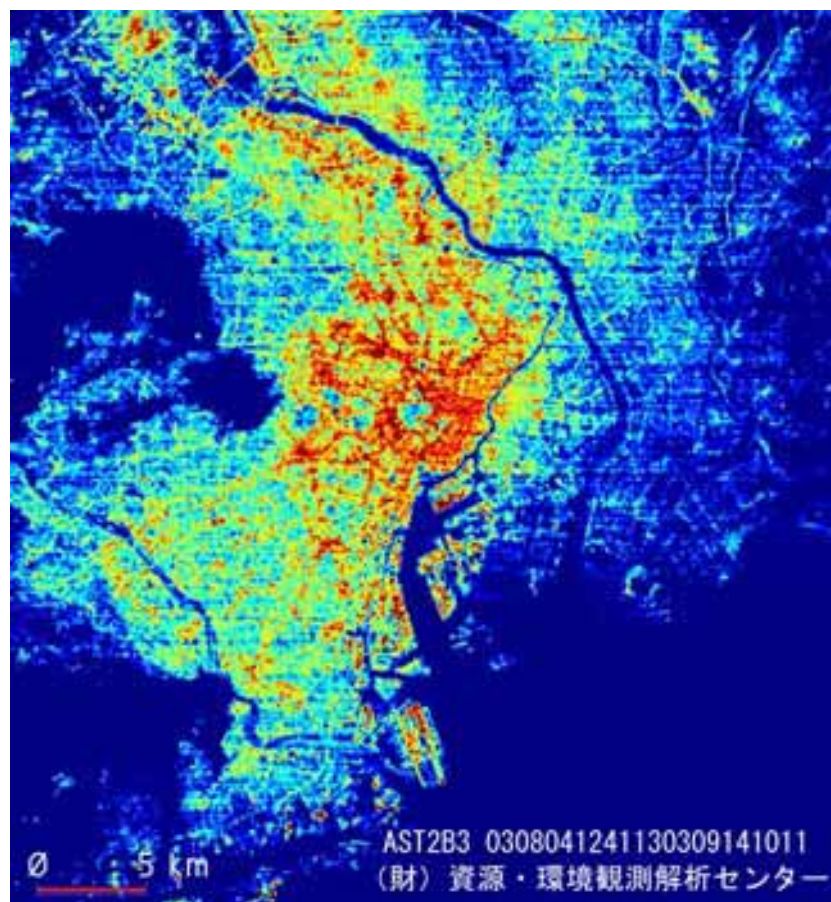
次の図は、東京の夜間における地表面の温度分布を見たものである(2003年8月4日午後9時41分)。この資料は、財団法人資源・環境観測解析センター作成のもので、同センターでは衛星により地表のさまざまな状況を観測している。この図で郊外部が暗くなっているのは地表の温度が低いことを意味するが、都心部でグレーが濃くなっているところは温度が高いことを示す(元の図はカラーのため)。皇居を取り囲むようにして高温域が分布している様子がわかるが、特に隅田川右岸～湾岸地区、副都心地区の温度が高くなっていることがわかる。また、幹線道路沿いの温度も高くなっている。その主な理

由は、昼間蓄熱した鉄筋コンクリートのビルが夜間に熱を放出しているためであると考えられる(木造建築物は昼間放熱する)。そしてこれが熱帯夜の主な原因のひとつであると考えられている。

また、都心の温度が夜間になっても下がらない大きな理由のひとつとして緑地が少ないことがあげられる。図表4は緑地分布を見たものであるが(薄い部分が緑が少ないところ)、都心にはほとんど緑地がない様子がわかる。このような状況下、「大江戸打水大作戦」が今年も行なわれた(図表5)。

それでは以下、高いところから東京の景色を見てみよう(2004年8月撮影)。

図表3 東京の地表面温度分布



(出典) 財団法人資源・環境観測解析センター

図表4 東京の緑地分布(2000年4月9日)



(出典) 財団法人資源・環境観測解析センター

図表5 大江戸打水大作戦(都庁舎前広場、2000年8月18日)



図表6 豊洲センター・ビルからレインボー・ブリッジ～築地方向を見る



図表7 晴海トリトン・スクエアから勝どき方向を見る



図表8 レインボー・ブリッジから品川～天王洲方向を見る



図表9 世界貿易センター(浜松町)から汐留方向を見る



図表10 世界貿易センター(浜松町)から品川方向を見る



図表11 南青山三丁目から六本木方向を見る



図表12 北青山三丁目から新宿方向を見る



図表13 山王パークタワーから赤坂方向を見る



図表14 文京シビック・センターから大手町～新橋方向を見る



図表15 文京シビック・センターから新宿～駒込方向を見る



図表16 文京シビック・センターから駒込～神田方向を見る



図表17 東京都庁南展望台から大手町～六本木方向を見る



おわりに

風水では「背山面水」が良いと言うが、この景色はどんなものであろうか。特に最後の写真などを見ると、大手町～丸の内～日比谷～新橋には既に巨大な壁が出来ており、それが次第に品川、六本木、天王洲等につながっていくような印象を受ける。あるいは松

本零士の『大純情君』が思い出されたりもする。この壁が東京湾の風を遮っていないとは考えにくい。が、東京都の観測体制が充実してきており、専門化の分析も進んできているので、近い将来ははっきりしたことがわかるであろう。